

2021年度

日本精神分析的心理療法フォーラム第10回大会
プログラム

2021年7月3日（土）～7日4（日）

主催 日本精神分析的心理療法フォーラム

◆大会企画シンポジウム.....	2
◆大会企画分科会.....	4
◆大会企画ワークショップ.....	6
◆会員企画分科会.....	12
◆研究発表.....	16

◆大会企画シンポジウム

全体会シンポジウム	「エナクトメントと逆転移の取り扱い： 学派による対話」
7月3日（土）14 時00 分～18 時00分	
<p>企画・司会： 馬場天信（追手門学院大学）、 横井公一（微風会 浜寺病院）</p> <p>シンポジスト： 西村 理晃（ロンドン医療センター） 富樫 公一（甲南大学） 吾妻 壮（上智大学）</p> <p>指定討論： 奥寺 崇（クリニックおくでら）、横井公一（微風会 浜寺病院）</p>	

精神分析、精神分析的な心理療法の治療関係では、患者の無意識的な言動について、その力動的な理由や意味を明らかにし、自己理解を深めるために、治療者は転移や逆転移、エナクトメントを理解しようと努め、患者と協働作業を続けているのは周知の事実です。近年、エナクトメントへの関心と認識が徐々に広まりつつあると言えますが、治療関係の深まりで生じてくる逆転移やエナクトメントを治療者がどのように捉え、治療場面で患者とどのように取り組んでいくのかに焦点をあてたいと考えこのシンポジウムを企画しました。副題として学派による対話とつけた通り、そこには転移、逆転移、エナクトメントに対する捉え方の相違があるかもしれません。しかしながら、精神分析や精神分析的な心理療法の実践において最も重要となるのは、治療関係の中で生じる逆転移やエナクトメントを治療者がどのように理解し、患者と取り組んでいるのか、そこにおける異同とその意味を理解し、日々の実践に取り入れていくことだと思います。本フォーラムは今年で10年という節目となりますが、設立当初から学派間における民主主義的な対話を大事にしてきました。学派間における理論的な対立ではなく、会員の皆様の日々の精神分析的な心理療法の臨床実践に役立つ「対話」となればと思っております。

本シンポジウムでは、3名の先生方にシンポジストとして各45分の話題提供を頂きます。西村先生からは、英国クライン派において逆転移、特にエナクトメントとしての逆転移をどのように捉えてきたかを解説頂き、その上で、精神分析的な心理療法のケースを通して、どのようにその複雑性に向き合っていく必要があるのかについてお話を頂く予定です。富樫先生からは、間主観的フィールドに浮かび上がるエナクトメントという概念から、そのような概念をデザインする臨床家の姿勢がエナクトメントを生み出す可能性についてお話し頂く予定です。吾妻先生からは、比較精神分析的な観点からエナクトメントの臨床的意

義について論じて頂き、更に面接頻度の違いとエナクトメントの扱い方の関連性、治療作用の問題についてお話し頂く予定です。先生方から話題提供を頂いた後に、奥寺先生、横井先生のお二人から指定討論を頂き、その後にシンポジストと指定討論者との対話の時間を30分程度とれればと考えております。また、会員の皆様からの質問を含めた全体での対話が行われることを願い、そのための時間を20分ほどとる構造としました。コロナ禍によりオンライン開催という制約はありますが、この全体会を通して少しでも臨床実践に役立つ様々な対話が展開することを期待しております。

◆大会企画分科会

大会企画分科会	「心理療法で語られるトラウマの物語」
7月4日（日）16 時30 分～19 時00分	
企 画	： 櫻井 鼓（追手門学院大学）
司 会	： 上田順一（大倉山子ども心理相談室）
シンポジスト	： 平井正三（御池心理療法センター） 櫻井 鼓（追手門学院大学） 森 茂起（甲南大学）

私たちの人生は、常にトラウマティックな出来事に晒されている。戦争、被災、犯罪被害、虐待、DV、いじめ。このような凄惨な出来事の体験に纏わる記憶の断片は、未完成な物語となり、人生の中でハイライトされ続ける。私たち心理療法家は、この物語のカタログ的要素とそれらが暗示する人生のつながりに耳を傾けている。そして私たち心理療法家は、トラウマティックな体験をした人たちが心理療法を人生に織り込んでいけるように援助することによって、トラウマティックな体験をも人生に織り込んでいくことができるように願っている。本分科会では、トラウマティックな出来事（記憶）がどのように心理療法に組み込まれていくのか、そしてその心理療法を通じてトラウマティックな出来事（記憶）はどのように人生に織り込まれていくのか、その諸相について3人の演者が発表し、続いてフロアの方々を含めて自由討議を行いたい。

「精神分析から見たトラウマ—ASDの事例を通して」

平井正三（御池心理療法センター）

フロイトが「保護壁を破断して侵入する刺激」と定義しているように、トラウマは自己組織が破壊される事態と見てよいだろう。自己は様々な部分の繋がりとして組織されていくが、そうした繋がりとは人との繋がりとは連動して形成される。このような意味でのトラウマは、繋がりそのものへの破壊的作用と理解できるが、そこには出来事自体の破壊性だけでなく、自我の性質の要因も大きい。精神分析的な心理療法の課題は、自己に脅威を与え続ける異物として内部に留まり続けるトラウマ経験が少しずつ象徴化され無害化されていくことであろう。そこでは遊び空間が重要な役割を果たす。本発表ではASDの事例を取り上げて、この問題について考えていきたい。

「犯罪被害者のトラウマと怒り」

櫻井 鼓（追手門学院大学）

犯罪被害による外傷は、他とは異なる突出した記憶であるように感じられる。外傷記憶はいつまでも色あせることなく、過去の外傷体験は、飛び石のごとくそこだけに光が当たっているかのように語られる。それだけ外傷は他の思い出とは馴染みにくい性質をもつものであるといえるだろう。加えて、犯罪被害者は悲しみ、無力感、怒りなどさまざまな情動にかき乱される。このような激しい情動もまた、自ら体験し、抱えていくのは困難な道のりである。発表では、単回性の外傷的出来事に遭った犯罪被害者の怒りを取り上げ、怒りが面接の中でどのように語られるのかについて事例をもとに示す。そして、その怒りをどう理解していくことが、その人の被害からの回復につながるのかについて話題提供をおこなう。

さらに、発表者は犯罪被害者への援助に携わる中で、外傷に焦点化した治療を行う認知行動療法の1つであるPE（Prolonged Exposure Therapy；持続エクスポージャー療法）にも出会った。PEの視点から、外傷に対する精神分析的なアプローチを再考することで、外傷に働き掛けを行う援助方法が共通して目指すものを探り出した。

「埋もれた記憶と歴史の発掘」

森 茂起（甲南大学）

過去の出来事の残滓と痕跡を探り、形にならないものを形にすることは、精神分析の営みの重要な要素である。その作業は、いくつもの要素や水準がある。身体反応、感覚、情動、認知それぞれの、意識と結びつけるという意味での発掘、トラウマ反応の馴化、解離が関わる場合の扱い、家族史等に関わる情報収集、それらを総合して見えてくる出来事の実態の認識、語りの形成などが含まれる。精神分析のなかに位置づけられて長い想起と確信だけでなく、世代間伝達による、一度も経験されたことのない出来事的作用も含まれる。記憶の外の事象についても「事後性」を考えねばならない。これらの問題領域について可能な範囲で扱ってみたい。

◆大会企画ワークショップ

大会企画ワークショップ1	「遊ぶこと」再考
7月3日（土）10時00分～12時30分	
講師： 館直彦（たちメンタルクリニック）	

「遊ぶことplaying」は、Winnicottが、精神分析臨床で起こっていることを表現するために用いた有名な概念である。彼は、「遊ぶことそれ自体が治療的である。」と述べている。しかし、「遊ぶこと」は、分かるようで分からないところがあるように思う。

彼自身が遊ぶことに親和性があったのだろうが、彼は、子どものセラピーを通して「遊ぶこと」を着想し、Kleinから教えを受けて、その着想を広げた。そして彼は、精神分析臨床において、様々な局面で「遊ぶこと」が展開している、と考えるようになった。彼は、遊ぶ内容は、そんなに重視していない。一方、「遊ぶこと」が関係性の中で展開すること、枠組みframeが必要なこと、ゲームとは一線を画すことなどを強調している。「遊ぶこと」は創造的である、ということから、彼は、これを移行対象、移行空間へと結び付けていった。そして、彼は「遊ぶこと」を目指す新しい精神分析技法を提唱するようになった。

彼は、「遊ぶこと」をととても広義に用いることもあり、ときには生きることと同義であったりする。結局、その本質は何か、と問われるならば、それはパラドックスにある、ということになるだろう。しかし、私たちはそのパラドックスを外から眺めるのではなく、パラドックスに巻き込まれて、変形transformされていくことになる。そう考えると、「遊ぶこと」は脱構築deconstructionと対比されるものであるかもしれない。「遊ぶこと」は、常に新しい経験を生み出すのだが、彼の文章を読む私たちもまた、新しい経験をすることになるのは、彼と私たちの「遊ぶこと」の領域が重なり合うからである。そして私たちは、予期せず、自分を発見するのである。

以上に述べたのは、「遊ぶこと」のポジティブな側面である。実際には、病的な遊びもあり、強迫的な反復遊びもある。「遊ぶこと」は幸福で、健康なものである、ということWinnicottは暗黙の前提としているのだが、本当にそうなのだろうか。Fort-Daの遊びは喪失の痛みと結びつく。「遊ぶこと」には攻撃性も含まれ、場合によっては悪にも至る。大人は遊べるのだろうか。ここで、Andre Greenの考えを取り入れて、心にはネガティブな領域もある、と考えることが、「遊ぶこと」の理解を深めるのではないか。「遊ぶこと」再考には、そういうことも含まれる。ここでは、精神分析全体の流れを通して、「遊ぶこと」の意味について考えてみたい。

大会企画ワークショップ2	「間主観性概念をゼロから学びなおす： 現象学×精神分析」
7月4日（日）10時00分～12時30分	
講師： 浜渦 辰二（上智大学） 増尾 徳行（ひょうごこころの医療センター）	

「間主観性をめぐるフロイトとフッサール
—リクール『フロイトを読む』を手がかりに一—

浜渦辰二（上智大学）

フロイト（F）とフッサール（H）には、共通点が多い。オーストリア帝国モラヴィア地方のユダヤ商人の家に生まれ、ドイツ化したユダヤ人として育ち、世紀末ウィーンを生き、ブレンターノの講義を聞き、世紀の変わり目（1900）に出発点となる著作を発表し、「考古学」に関心を持ち、「仕事／作業」という語に執着を持ち、超民族的な普遍的知性による連帯を求めた。他方で、相違点も多い。子供の頃から「天才」と言われ、考古学、心理学、小説を読み漁りながらウィーン大学医学部に進んだFに対して、数学だけは抜群だが他の授業には興味をもたず、ライプチヒ大学で天文学を修めたものの、ベルリン大学哲学部に入学して数学と哲学に向かったH。行動的・実践的な「治療的実践の思想」により「相互主体的・対話的な洞察」をもって、臨床の場で患者から学ぶことを大切にしたF。Fに劣らぬほど多くの学者と「対話」の代替として書簡を交わし、『年報』により同志と共同作業をしながらも、「哲学的な孤独」「独我論的な考察」を大切にしたH。

「HはF的無意識に接近していきながら、結局は挫折してしまう」とリクールは二人の「無意識」のギャップを指摘する。「間主観性」の問題においては、むしろ「HとFの差異は消失したように見える」が、「間主観性という主題は、おそらくそこにおいて現象学と精神分析とがもっとも近くところであると同時に、もっとも根本的に区別されるところでもあろう」と、リクールは言う。なぜなら「精神分析は作業である」からで、「それが精神分析を現象学から完全に区別する」のだと言う。それは、精神分析のもつ「技術」「治療法」のことであろうか。

リクールが『フロイトを読む：解釈学試論』を刊行した時点（1965）では、『フッサール全集』の『受動的総合の分析』（1966）、『現象学的心理学』（1968）、『間主観性の現象学』三巻本（1973）のいずれも参照できなかった。『受動的総合の分析』には、「無意識」「抑圧」「衝動／欲動」といった用語が見られ、1922年にスイス精神医学会で「現象学について」という報告をしたビンスヴァンガーを、その翌年にHは訪問して討議をしたという。Hの蔵書のなかには、フロイトの著作2点、ユングが1点、ビンスヴァンガーが6点、「無意識」を論じた図書が数点保存されている。間主観性をめぐるフロイトとフッサールを問い直してみたい。

「ウィニコット、そして間主観性、リクールとの対話」

増尾徳行（ひょうごこころの医療センター）

キーワード：遊ぶこと、主観的経験、自由連想

ウィニコットは、すぐれて間主観的な感性を持った分析家であったと思う。彼がこう述べたとき、精神分析はこれまでの伝統から離れた。

精神分析、心理療法、遊びという素材、遊ぶこと、という並びから離れ…たいと思う。すなわち普遍的なのは、遊ぶことであり、健康に属する。精神分析は…遊ぶことを高度に特化させた一形式として発達した。

いったい、何が起きたのか。

フロイトの精神分析において、自由連想は素材である。つまりそれらは無意識の派生物であり、その背景にある無意識的願望に本来の意味がある。それを解釈することで、治療的变化が生じる。私にとってこれは、プラトンの思考枠組みと相似形であるように思える。つまり、不完全な仮象としてこの世界があり、背後に真の実在であるアイデアがある、という考えである。私たちがセッションで出会う素材は仮のものであり、本来のものは無意識のうちにある。

精神分析を遊ぶことというカテゴリーに含めたとき、ウィニコットは遊ぶことそのものの価値を強調した。

心理療法は、遊ぶことの領域2つが重なるところに生じる。つまり患者のものと治療者のものである。心理療法は、2人がともに遊ぶことと関係がある。

このとき彼は、心理療法において2つの自己が主観的に経験するところを描写した。その出会いにおいて、それぞれが互いに相手を変形する。変形、すなわち対象を主観的に意味づけるのである。それゆえ、精神分析は無意識の意味を探索するものではない。精神分析をすることそのものに意義がある。無意識の意味から出会いに生起する現象へ焦点を移行したのは、フッサールの関心に似るものと思う。

こうした理解に基づいて、リクールのテキストを読むと、彼がフロイトの無意識にいたろうと格闘する様子が思い浮かぶ。そこはグリーンが指摘するように、ウィニコットが遊ぶことという概念に注力するあまり、ほとんど論じなかったところである。それゆえリクールによる無意識へのアプローチに、私は畏敬の念を抱く。

ウィニコットとリクールは、間主観性ということばで結びつきうるだろうと思うのは、私の勘違いかもしれない。その勘違いは、「学び直す」には、よい素材となるだろう。ただ自由連想から思い起こすと、ある種の理解にいたれるかもしれない、とも思う。ウィニコットがそれに価値を置いたのは間違いでないし、リクールの議論はそれを基盤にしている、と私には読めるからである。

大会企画ワークショップ3	「Psychoanalysis Groups with virus」
7月4日（日）10 時00 分～12 時30分	
講師： 十川 幸司（個人開業） 飛谷 渉（大阪教育大学 保健センター）	

「精神分析の基盤を再考する」

十川 幸司（個人開業）

人間は他の人間と直接会い、接触することによって、人間としての生を作り上げている。複数の身体が、織りなす営みが、人間の生に他ならない。SARS-CoV-2は私たちの生活から、このような身体性を奪うかのように、巧妙に働くウィルスである。コロナ禍のなかで私たちは、人間経験における身体の根源性を実感している。

ところで、精神分析は「心の接触」の技法と誤解されがちだが、それは身体と無関係な心的営為ではない。精神分析は徹頭徹尾、人間の身体性に基づいた実践である。昨年以來続く、コロナ禍における身体性の剥奪の経験（直接的な身体接触の回避）は、精神分析の基盤について、私たち臨床家が再考を迫られるクリティカルな機会になったとも言える。

飛谷先生は、最近、ビオン、メルツァーに依拠しつつ、「心のインフラ」という興味深い概念を提示している。その考えによれば、精神分析体験は、患者の心に「皮膚」（ビク）と「脊椎」（メルツァー）という構造を提供し、それらが分化していくことを可能にする。そしてその体験を担うのは、患者の情動体験を支える「コンテイナー・コンテインド・ユニット」なのである。この「ユニット」が、患者と治療者の身体性と結びついていることは明らかだろう。

「心のインフラ」というテーマは魅力的である。フロイトは心のインフラがエディプス体験にあると考えた。その後、例えばラカンが独自のフロイト読解から、現実界、象徴界、想像界という三つの領域を取り出し、それらの相互関係の中に、心のインフラを見いだしている。私は、ラカンを出発点としながらも、彼のジャルゴンを捨て去り、三つの領域を「言語」「情動」「欲動」「感覚」の四つの回路に新たに区分し直し、それらの作動のあり方を検討してきた。そして最近では、私の関心は、欲動という最も身体と結びついた領域の作動のあり方とリズムの問題へと向かっている。要点だけを述べるなら、欲動はリズムという動き＝形をもって作動するときに、「心のインフラ」としての患者の身体性が再構築される。そしてこのリズムを与える作業こそが、分析的交流の本質に他ならない。この論点は、学派は違ってもとはいえ、飛谷先生の考えと似通うところがある。本対談では、「心のインフラ」をめぐる様々な論点を話し合ってみたい。

「心的生命インフラの復旧作業としての精神分析：

コロナ禍におけるプロト・メンタルの活性化と

エディプス状況のバーチャル化がもたらす「心の仮死」について」

飛谷 渉（大阪教育大学 保健センター）

今回、十川幸司先生との対談の機会をいただいた。私は、パンデミックの渦中において、「人の心の生命インフラ」とコロナ禍におけるその変形の様子について考えてみたい。私が鍵概念とするのは、「エディプス状況」と「コミュニケーション（投影同一化）」、そして「プロト・メンタル・マトリクス」である。

人の起源をクロマニヨン人に遡るならば、氷河期において洞窟生活を強いられた彼らがそこに描いた人類最古のアートといわれるラスコー壁画は、ホモサピエンス生き残りの証であり、人類の進化の謎を解く鍵となろう。現代人もいま、コロナ禍という洞窟に暮らす原始人のごとき生活を強いられている。

ビオンは独自の精神分析的な「思考の理論」を創造した精神分析者である。彼は、「人が他者の心を通じて自分自身の経験を発見すること」、つまりデカルトの「我思うゆえに我あり」というナルシシスティックな近代的主体を、「汝思うゆえに我あり」という相互的人間観を持つ現代的主体へとラディカルに社会化した。ビオンの「思考モデル」は、人の心が他者との出会いと交流によって存在となるという、「相対論」であり「接触」の精神分析である。ここには他者との間でつながり (link) が生じる心の磁場が想定される。それを彼はプロト・メンタル・マトリクスと呼ぶ。このプロト・メンタルは思考としての空想が立ち上がる寸前の状態を指す字義通りの「原心性」であり、心の原型基質である。それは心・身体・集団という三つの領域へと分化する潜在性を内包した心的基質であり、人の心が存在する「様式」であり「場」となる。

今我々が経験しているパンデミックでは、まさにこのプロト・メンタル・マトリクス次元が過剰刺激され、人が無思考状態に陥りやすくなっている。無思考は夢見の停止として現れ、それは心の仮死を意味する。感染症の脅威のもとで、至近距離でのコミュニケーションは即座に死の恐怖を掻き立てるため、我々は自ずとテレ・コミュニケーションに頼る。我々は洞窟に隔絶され、情動性、身体性、社会性がつながりを失って乖離する特殊な氷河期にいる。その洞窟の中で我々は、心は瀕死だが身体的には生き残っている「生のようなもの」を生きることが強いられ、接触せぬまま「接触のようなもの」を体験している。こうした中、心のインフラとしてのエディプス的体験がバーチャル化することで、我々は生きている実感を失いつつあるのかもしれない。

大会企画ワークショップ4	大会企画事例検討会 「児童養護施設における 子どもの精神分析的心理療法」
7月4日（日）13時30分～16時00分	
司 会：金沢 晃（神戸市外国語大学） 事例提供：吉岡 彩子（御池心理療法センター） コメンテーター：生地 新（北里大学大学院 医療系研究科） 脇谷 順子（杏林大学 保健学部）	

今大会は、「児童養護施設における子どもの精神分析的心理療法」というテーマで事例検討会を開催いたします。愛情剥奪や不適切な養育を受けた子ども達に向き合うために、精神分析はどのようなことを教えてくれるのでしょうか。この事例検討会では、児童精神科医で、子どもと青年の精神分析臨床に携わってこられた生地新先生と、タビストッククリニックで子どもの心理療法士の資格を取得された脇谷順子先生を講師にお招きします。事例提供者の吉岡彩子先生に、児童養護施設における精神分析的心理療法の取り組みを報告していただきます。

◆会員企画分科会

会員企画分科会【No. 1】	思春期・青年期の家族力動～依存と自立とコロナの間で～
7月3日(土) 10:00～12:30 ミーティングルームB	
企画者・発表者：	山岡 亜里紗 (京都精神分析心理療法研究所) 今江 秀和 (広島市立大学) 野原 一徳 (豊橋技術科学大学) 伊藤 未青 (京都精神分析心理療法研究所) 松本 寿弥 (名古屋大学)
企画者・指定討論：	鈴木 健一 (名古屋大学)

企画趣旨

ここ数年、SCや学生相談において、保護者からの連絡や教員との連携などが増加している。そして、2020年は新型コロナウイルス感染症による影響で、オンラインや電話、メールでの相談や連絡等を余儀なくされ、これまでの一対一の面接構造を保つことが難しい1年でもあった。このような状況下においても、セラピストとのかかわりを通して学生は変化し、新しい家族の関係が紡がれる。本分科会では、幼少期に安全保障操作により作られた親の求める良い子として振る舞うという対人関係のパターンでは立ち行かなくなった時に不応と なった学生の事例を提示する。そこから、親が介入したケース、セラピストと一対一で関わったケース、複数の関係者が関わったケースと多様な関わり方と、その後の家族関係の変化について、青年期後期のテーマでもある”依存と自立”の視点から5名の発表者が報告する。最後に指定討論のコメントを加え総合考察をする。

会員企画 分科会 【No. 2】	臨床心理士指定大学院附属相談室における精神分析的設定でのケース実践について⑥ -様々な年代の事例から「精神分析的設定」について改めて考える-
7月4日(日)	10:00~12:30 ミーティングルームC
企画者:	林 秀樹(就実大学)・中澤 鮎美(大阪経済大学心理臨床センター)
司会:	林 秀樹(就実大学)・中澤 鮎美(大阪経済大学心理臨床センター)
発表者:	井本 ひかる(大分障害者職業センター) 蘆原 薫(大阪経済大学大学院) 山崎 亮太(大阪経済大学大学院) 浅見 隆史(大阪経済大学大学院)
指定討論:	山本 昌輝(立命館大学)

企画趣旨

臨床心理士指定大学院修士課程の2年間は、臨床家としての訓練を受ける期間である。しかし、期間が限定されている修士の2年間では、精神分析的な実践は馴染みにくい現状がある。

私たちはこれまで5度の分科会を設け、大学院生が担当した「精神分析的設定」によるアセスメントセッションを検討し、修士課程の訓練として精神分析的設定を取り入れる意義を多様な側面から検討してきた。特に前回は、「枠」の訓練的意義について改めて検討した。そこでは、定位置からクライアントを観察する「枠」が支えとなり、逆転移を通じたクライアント理解が促進される一方で、「枠」を維持することの難しさについても議論された。

今回は、様々な年代のアセスメント過程を提示し、クライアントの理解を深めながら、「精神分析的設定」が指定大学院の訓練として寄与する側面について改めて検討したい。

会員企画分科会【No. 3】	精神分析的セラピストになることと精神分析的 コミュニティ 一次世代が担うものと担わないもの—
7月4日(日) 16:30~19:00 ミーティングルームB	
企画者：	山崎 孝明 (子ども・思春期メンタルクリニック) 吉沢 伸一 (ファミリーメンタルクリニックまつたに)
司会：	山崎 孝明 (子ども・思春期メンタルクリニック)
発表者：	吉沢 伸一 (ファミリーメンタルクリニックまつたに) 井元 健太 (こころのドア船橋/カウンセリングオフィス SARA)
指定討論：	関 真粧美 (南青山心理相談室)

企画趣旨

精神分析的セラピストになるには、治療を、SVを、セミナーを受ける必要がある。一人で精神分析的セラピストになることはできない。インスティテュートに所属しているといえなくとも、精神分析的セラピストはなんらかのコミュニティに属さざるを得ない。すると、子どもが独力で大人になることはできないように、私たちも「親」の影響を—それがよいものであれ悪しきものであれ—受けることは避けられない。日本の精神分析コミュニティはなかなかその歴史を相対化して語り考えることができないできたようである。意識化できなければ行動として反復するしかないことを私たちはよく知っている。継承しない方がよい負の遺産もある。しかし、もちろん遺産すべてを捨て去る必要はなく、受け継ぐべき正の遺産もある。ただ、その線引きは一筋縄でいくような容易なものではない。本分科会は、正負を判断する機運を高める端緒となることを目指すものである。

会員企画分科会【No. 4】	精神分析的視点の活用と応用 —子どもを取り巻く環境との協働関係に焦点をあてて—
7月4日(日) 16:30~19:00 ミーティングルームC	
企画者：林 秀樹(就実大学) 発表者：林 秀樹(就実大学) 久永 航平(葛城市子ども・若者サポートセンター／太子道診療所) 安達 洋助(認定NPO法人 子どもの心理療法支援会) 指定討論：鵜飼 奈津子(大阪経済大学)	

企画趣旨

精神分析はその歴史の中で様々な領域で応用され、その実例が数多く報告されている。実際に以前の分科会で私たちは、教育領域や福祉領域におけるアセスメント事例を持ち寄り、各領域における多様なアセスメントの実際を議論した。しかしその中で、子どもの理解がたとえ立ち上がったとしても、子どもを取り巻く環境(教師や母親、支援者など)に対してどのように考えや想いを伝えて働きかけていくのか、この点については更なる検討の余地が残された。特に、精神分析的視点では子どもの空想や転移-逆転移関係など、精神分析をオリエンテーションとしていない人には馴染みにくい視点が多分に含まれており、共通理解が困難になりやすいと思われる。そこで本分科会では、様々な領域において行われた精神分析的視点をを用いて関わった事例を提示し、特に子どもを取り巻く環境との協働関係に焦点を当てながら、指定討論の先生やフロアの先生方と検討したい。

◆研究発表

研究発表【A】 7月4日(日) 13:30~16:00

研究発表【No. 1】	治療初期に報告された夢の意義について
峰 千春 (Austen 心理相談室、中高スクールカウンセラー)	
キーワード：夢解釈、両親カップルへの攻撃、罪業感	

研究発表【No. 2】	治療構造からの逸脱を取り扱うこととその意義 －摂食障害患者との心理療法事例から－
田代 萌 (上智大学)	
キーワード：治療構造、逸脱、摂食障害	

研究発表【No. 3】	ラカン、マインドフルネス、禅
西村 則昭 (仁愛大学)	
キーワード：ラカン、マインドフルネス、禅	

研究発表【B】 7月4日(日) 13:30~16:00

研究発表【No. 4】	保育現場における乳幼児観察を応用したクラス観察 －治療的効果と限界－
西野 将史 (東京女子大学大学院)	
キーワード：タビストック方式乳幼児観察の応用、社会的防衛、在-不在のサイクル	

研究発表【No. 5】	子育てに孤立感を感じる母親たちの短期集中グループ： 孤立感からの脱却のカギとは？
揖斐 衣海 (KIPP 渋谷心理オフィス)、西村 馨 (国際基督教大学)、 大橋 良枝 (聖学院大学)	
キーワード：母親、怒り、認識的信頼	

研究発表【No. 6】	組織文化への精神分析的アプローチとしての ワークディスカッション
山村 真 (くわな心理相談室)	
キーワード：組織文化、ワークディスカッション、アクションリサーチ	